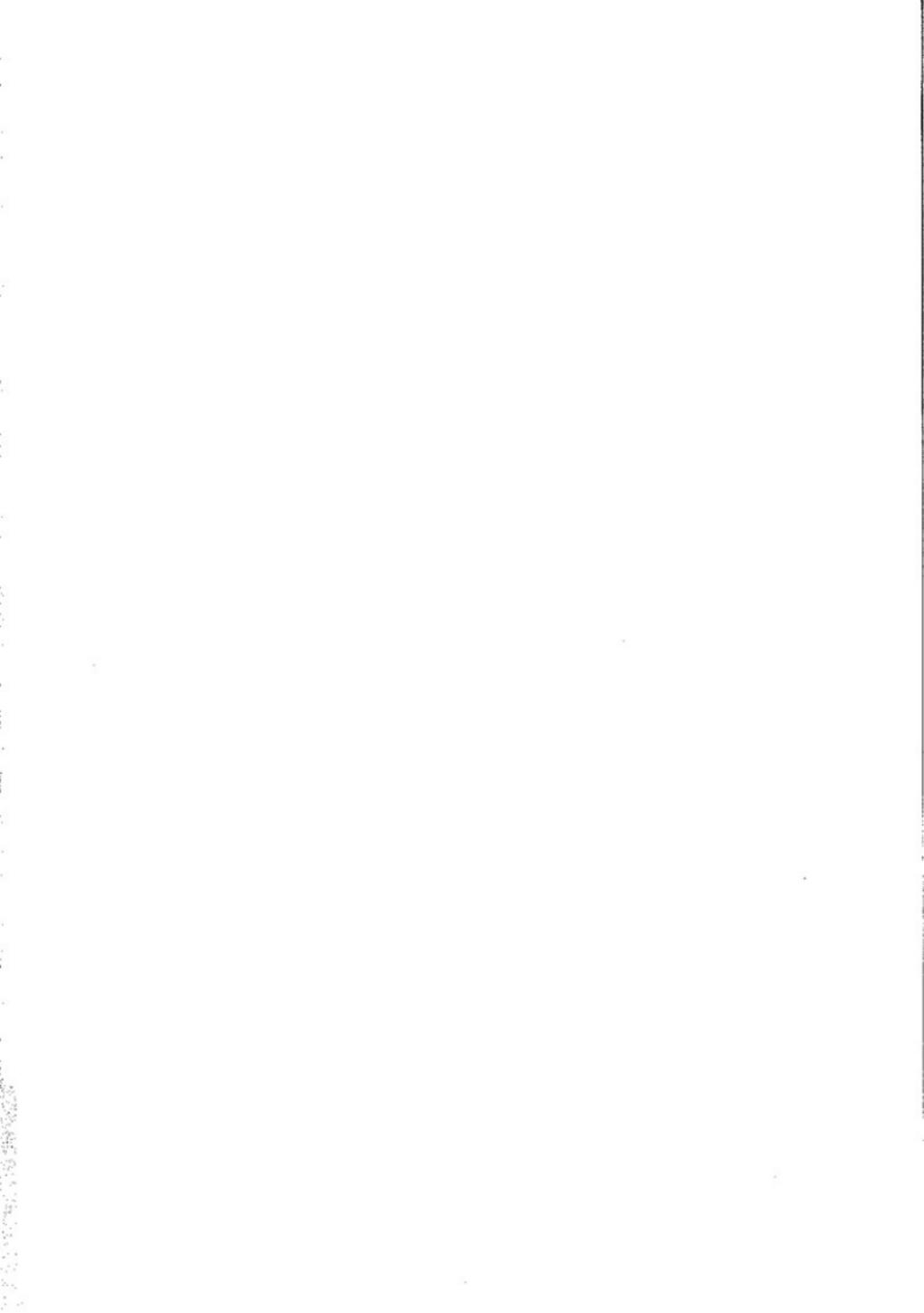


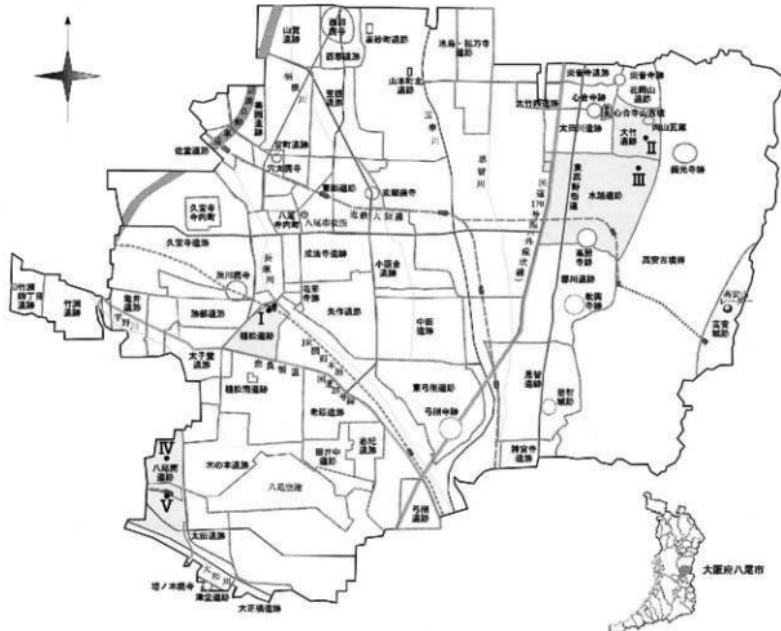
- I 植松遺跡(第11・12次調査)
- II 大竹遺跡(第2次調査)
- III 水越遺跡(第10次調査)
- IV 八尾南遺跡(第34次調査)
- V 八尾南遺跡(第35次調査)

2011年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



- I 植松遺跡(第11・12次調査)  
 II 大竹遺跡(第2次調査)  
 III 水越遺跡(第10次調査)  
 IV 八尾南遺跡(第34次調査)  
 V 八尾南遺跡(第35次調査)



2011年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

## はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。八尾市は古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く存在しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

本書は、平成21・22年度に行いました公共事業に伴う発掘調査の成果を収録したものであります。主な成果としては、水越遺跡で中世末～近世初頭、八尾南遺跡では古墳時代初頭、古代、中世、近世にわたる集落域が確認されました。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 西浦昭夫

# 序

1. 本書は、財団法人八尾市文化財調査研究会が平成21・22年度に実施した公共事業に伴う発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成23年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
1. 本書に収録した各調査報告の文責は、I・IV成海佳子、II・III・V坪田真一で、全体の構成・編集は坪田が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1(平成8年7月発行)・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成22年度版)をもとに作成した。
1. 本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位(T.P.)である。
1. 本書で用いた方位は磁北あるいは座標北(国土座標第VI系〔世界測地系〕)を示している。
1. 遺物実測図の断面は、須恵器・陶磁器が黒、他は白とした。
1. 土色については『新版標準土色帖』1997年後期版 農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

# 目 次

## はしがき

## 序

I 植松遺跡第11・12次調査(UM2009-11・12).....	1
II 大竹遺跡第2次調査(OT2010-2).....	11
III 水越遺跡第10次調査(MK2009-10).....	15
IV 八尾南遺跡第34次調査(Y S 2009-34).....	23
V 八尾南遺跡第35次調査(Y S 2010-35).....	35

報告書抄録

I 植松遺跡第11・12次調査(UM2009-11・12)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市安中町四丁目地内で、駅舎・道路等建設に伴い実施した植松遺跡第11・12次調査(UM2009-11・12)の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 成海佳子が担当した。
1. 各調査の要項は下記のとおりである。

	第11次調査(UM2009-11)	第12次調査(UM2009-12)
調査地	八尾市安中町四丁目地内	八尾市植松町三・四丁目地内
調査原因	駅舎・道路等建設(その2)	駅舎・道路等建設(その1)
調査期間	平成22年1月26日～3月5日	平成22年1月27日～3月5日
調査日数	1日	4日
調査面積	約6m <sup>2</sup>	約36m <sup>2</sup>

1. 現地調査には、市森千恵子・田島宣子・徳谷尚子・西出一樹の参加を得た。
1. 内業整理は現地調査終了後に着手して平成23年3月をもって終了した。
1. 本書の執筆・編集は成海が行った。

## 本　文　目　次

1.はじめに.....	1
2. 第11次調査.....	1
1) 調査方法と経過.....	1
2) 基本層序.....	2
3) 検出遺構と出土遺物.....	2
4) まとめ.....	2
3. 第12次調査.....	3
1) 調査方法と経過.....	3
2) 調査成果.....	3
3) まとめ.....	6

# I 植松遺跡第11・12次調査(UM2009-11・12)

## 1. はじめに

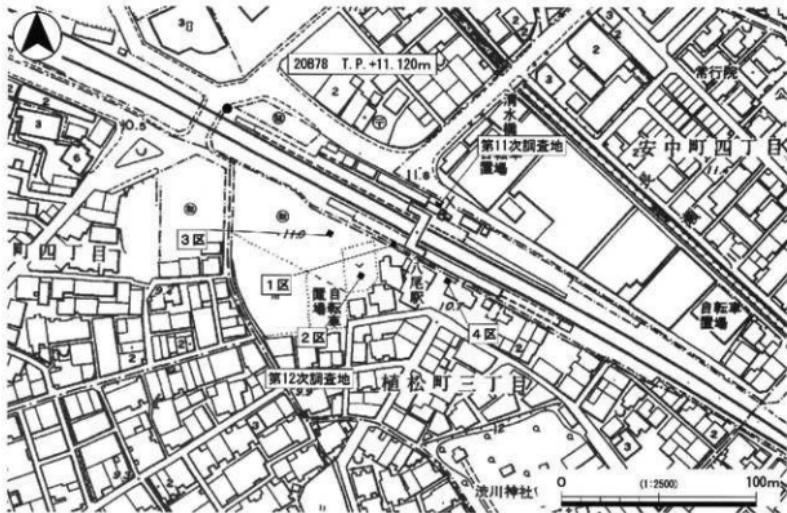
植松遺跡は八尾市南西部に位置する遺跡である。その範囲は東西約0.8km・南北約0.8kmおよび、現在の行政区画では安中町四丁目・植松町三～八丁目・水畠町二・三丁目にあたる。地理的には旧大和川の主流であった古長瀬川と古平野川の分岐点付近に位置しており、中央部に古平野川の自然堤防が形成されている。この自然堤防上には、跡部遺跡・太子堂遺跡・亀井遺跡・竹渕遺跡などが連なって位置している。

当遺跡発見の経緯は、昭和56(1981)年に八尾市教育委員会が永畠町二丁目で行った発掘調査で、平安時代前期の居住域が検出されたことによる。その後、大阪府教育委員会・財團法人大阪府文化財センター・八尾市教育委員会・当調査研究会によって、数件の調査が行われている。これまでの調査結果から、自然堤防は古墳時代後期～平安時代の埋没河川であること、南部の沖積地上には弥生時代前期～中期の居住域や墓域、古墳時代前期の居住域、奈良時代の生産域、平安時代の居住域、さらに中世の遺構・遺物などが検出されている。

## 2. 第11次調査

### 1) 調査方法と経過

今回の調査は、当研究会が植松遺跡内で行った第11次調査にあたる。調査原因は、JR八尾駅周辺の整備事業に伴うもので、掘削範囲は径約2×3m、面積は約6m<sup>2</sup>である。調査で使用した



第1図 調査地周辺図

高さの基準は調査区北西120m地点の八尾市街区多角点(20B78:T.P.+11.120m)である。

掘削方法は、現地表下0.4~0.5m前後までの盛土を機械掘削とし、1層以下6層粗粒砂上面までの1.0m間を機械・人力掘削を併用した。その結果、6層上面で東への落込みを検出した。その後、部分的に重機にて掘削を続行し、粗粒砂が1.5mにわたって堆積しているのを確認した。

## 2) 基本層序

第0層：盛土。既存建物建設・解体時の擾乱等が見られる。上面の標高は11.8m前後である。

第1層：黄褐色粘土質シルト、層厚0.3m前後、上面の標高は11.4m前後である。コンクリートやレンガなどが見られることから、駅舎建設に関わる近代の盛土・整地の可能性がある。

第2層：暗黄色砂質シルト、層厚0.1~0.2m。炭等を含む土壤化層である。

第3層：黄褐色砂質シルト、層厚0.1m前後。

第4層：黄灰色シルト～極細粒砂、層厚0.1m前後。

第5層：黄褐色極細粒砂、層厚0.1~0.2m。

第6層：黄灰色粗粒砂、層厚1.5m以上。

## 3) 検出構造と出土遺物

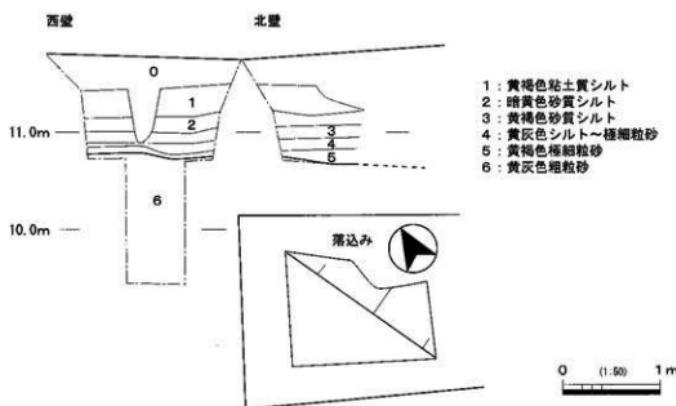
現地表下1.1m(T.P.+10.8m)前後の第6層黄灰色粗粒砂上面で、落込み1か所を検出した。

西から東に落ち、深さ0.15mまでを確認した。内部には第5層黄褐色極細粒砂が堆積する。

調査では遺物は出土していない。

## 4)まとめ

第6層は古大和川の主流の一つである長瀬川に起因する河川埋土にあたる。また、第4層・第5層も流水堆積層である。第6層上面で検出した落込みは、河川埋没の過程で形成されたものと考えられる。



第2図 平断面図

### 3. 第12次調査

#### 1) 調査方法と経過

今回の調査は、当研究会が植松遺跡内で行った第12次調査にあたる。調査原因是、JR八尾駅周辺の整備事業に伴うもので、掘削範囲は径約3×3m×4か所(1~4区)、面積は約36m<sup>2</sup>である。調査で使用した高さの基準は調査地北西120m地点の八尾市街区多角点(20B78:T.P.+11.120m)である。

掘削方法は、現地表下0.5~1m前後までの盛土を機械掘削とし、以下1~1.5m間を機械・人力掘削を併用し、遺構・遺物の検出に努めた。その後、部分的に1m前後を機械掘削し、下層の堆積状況を確認した。その結果、2区の現地表下2.5m(T.P.+9m)前後で遺物包含層を、現地表下2.7m(T.P.+8.8m)前後で土壤化層を検出した。

#### 2) 調査成果

##### ・ 1区

###### 〈層序〉

第100層：盛土。既存建物建設・解体時の攪乱等が見られる。上面の標高は12.0m前後である。

第101層：黄褐色粘土質シルト・灰褐色粘土質シルト・礫などからなるブロック層で、炭を含む。

層厚0.3m前後、上面の標高は10.8m前後である。この層上面で溝を検出した。

第102層：黄褐色細粒砂、層厚0.5m前後。

第103層：黄褐色細粒砂混粘土質シルト、層厚0.15m前後。

第104層：黄褐色砂質シルト、層厚0.9m前後。

第105層：灰色粘土質シルト、層厚0.2m前後。

第106層：青灰色粘土質シルト・黄灰色粗粒砂、層厚0.3m以上。

###### 〈検出遺構と出土遺物〉

現地表下1.1m(T.P.+10.9m)前後の第101層上面で溝1条(S D111)を検出した。幅0.4m・深さ0.15m・検出長1.9mを測る。埋土は①灰色粗粒砂、遺物は出土していない。地層から、近代の遺構と考えられる。

##### ・ 2区

###### 〈層序〉

第200層：盛土。既存建物建設・解体時の攪乱等が見られる。上面の標高は11.3~11.5m前後である。

第201層：黄褐色粘土質シルト・灰褐色粘土質シルト・礫などからなるブロック層で、炭を含む。

層厚0.3~0.5m前後、上面の標高は10.9m前後である。この層上面で溝(S D211)を検出した。

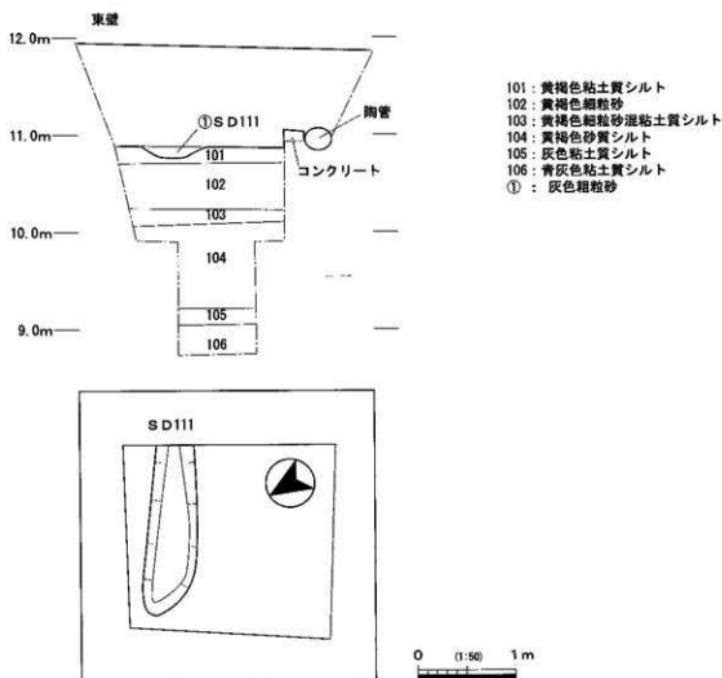
第202層：黄褐色粗粒砂混砂質シルト、層厚0.5m前後。

第203層：黄褐色粘土質シルト・灰色粘土質シルトのブロック層、層厚0.5m前後、この層上面で溝(S D221)を検出した。

第204層：褐色極細粒砂、層厚0.1m前後。

第205層：褐色粗粒砂混砂質シルト、層厚0.1m前後。

第206層：褐色極細粒砂混粘土質シルト、層厚0.1~0.3m、北下がりに堆積する。



第3図 1区平面断面図

第207層：灰色粘土質シルト・黄褐色粘土質シルトのブロック、層厚0.2～0.3m前後。内部に土師器の小片を含む。

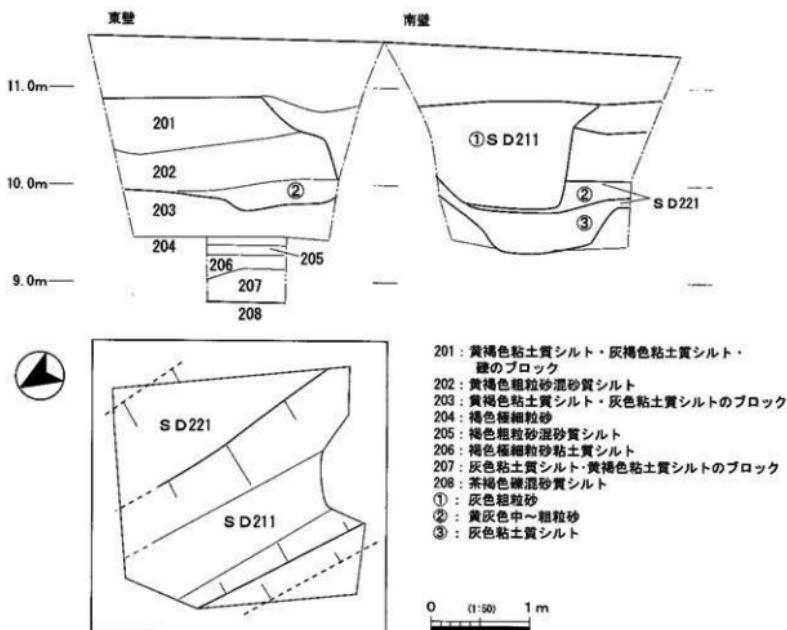
第208層：茶褐色疊混砂質シルト、土壤化層である。この層上面で掘削を終えたため、層厚は確認していない。

#### 〈検出遺構と出土遺物〉

現地表下0.7m(T.P. + 10.9m)前後の第201層上面で、溝1条(S D211)を検出した。幅2.1m・深さ1.1m測る。埋土は①灰色粗粒砂、遺物は出土していない。1区-S D111同様、近代の遺構であろう。

現地表下1.6m(T.P. + 10.0m)前後の第203層上面で、溝1条(S D221)を検出した。幅1.8m・深さ0.7m・検出長1.9mを測る。埋土は②黄灰色中～粗粒砂・③灰色粘土質シルトからなる。遺物は出土していない。

現地表下2.5m(T.P. + 9.0m)前後に堆積する第207層から、土師器の小破片が若干出土した。平安時代頃のものと考えられる。



第4図 2区平断面図

## ・3区

## &lt;層序&gt;

- 第300層：盛土。既存建物建設・解体時の擾乱等が見られる。上面の標高は11.5m前後である。
- 第301層：黄褐色疊混粘土質シルト、層厚0.4～0.5m、上面の標高は11m前後である。
- 第302層：黄褐色～青灰色粘土質シルト、層厚0.5m前後。この層上面で溝1条(S D311)を検出した。
- 第303層：青灰色極細粒砂混粘土質シルト、0.3m前後
- 第304層：青灰色極細粒砂、層厚0～0.2m前後。
- 第305層：黄灰色極細粒砂混粘土質シルト、層厚0.6m前後。
- 第306層：灰色粗粒砂、層厚0.2m。
- 第307層：灰色粘土質シルト、層厚0.1m前後
- 第308層：暗青灰色粘土質シルト、0.4m前後。
- 第309層：白灰色粗粒砂～疊、0.25m前後。

#### 〈検出遺構と出土遺物〉

現地表下0.9m(T.P.+10.5m)前後の第302層上面で、溝1条(S D311)を検出した。幅0.6m以上・深さ0.3mを測る。埋土は④黄褐色疊多量混砂質シルト、遺物は出土していない。

この他、302~304層は溝状遺構の埋土の可能性がある。また、最下の309層から305層にかけて砂脈が見られ、305層上面に噴砂(⑤)が見られる。

#### ・4区

##### 〈層序〉

第400層：盛土。上面の標高は11.2m前後である。

第401層：黒褐色粗砂、層厚0.2m前後、上面の標高は11m前後である。盛土の可能性があり、この層上面で、横矢板が設置されている溝(S D411)を検出した。

第402層：黄褐色粗粒砂混砂質シルト、層厚0.2m前後。

第403層：黄褐色細粒砂混粘土質シルト、層厚0.4m前後。

第404層：黄褐色細粒砂混粘土質シルト、層厚0.25m前後。

第405層：黄褐色中～粗粒砂混粘土質シルト、層厚0.25m前後。

第406層：赤褐色粗粒砂混粘土質シルト、層厚0.15m前後。

第407層：灰色粘土質シルト、層厚0.1m前後。

第408層：青灰色粘土質シルト、層厚0.2m前後。

第409層：暗青灰色疊混粘土質シルト、0.25m前後。

#### 〈検出遺構と出土遺物〉

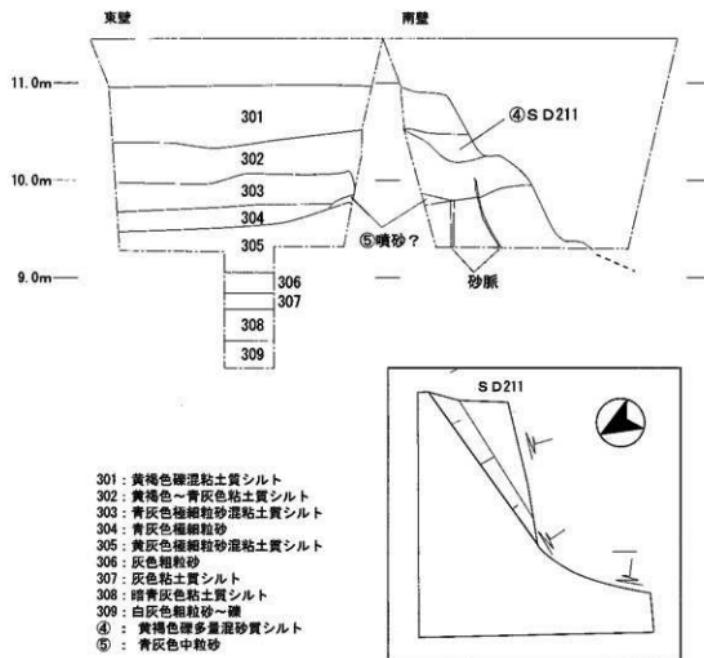
現地表下0.2m(T.P.+11m)の第401層上面で溝1条(S D411)を検出した。検出幅1m・深さは1.3mを測る。内部には枕木転用の材が2列・7本積み重ねられている。埋土は⑥黄褐色シルト～粗粒砂～疊のブロック・⑦青灰色粗粒砂からなり、枕木の裏込めとしている。駅舎の方向に一致していることから、近年の施設と考えられる。

#### 3)まとめ

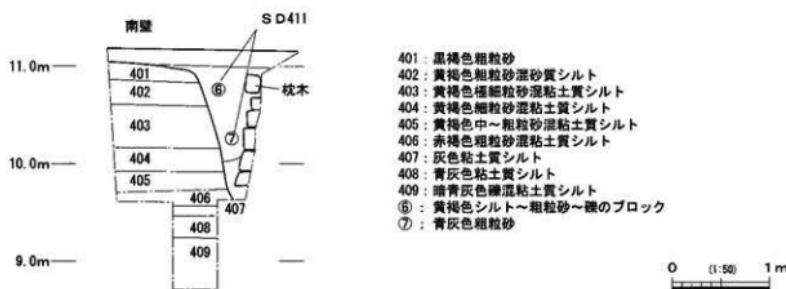
今回の調査では、上層部で近代～近世の遺構面、さらに下層で平安時代頃の土壤化層を検出することができた。JRの駅舎を挟んだ北東50mの第11次調査地や200m南東の第10次調査地では、比較的浅い現地表下1.1～1.5m(T.P.+11m)前後で古長瀬川に起因する河川埋土(粗粒砂)に至り、第10次調査地では上面で近世の遺構が検出されている。当調査地では、粗粒砂層は3区の現地表下3.2m(T.P.+8.3m)前後で検出されたのみで、近世以前の古長瀬川の流路からは外れていることがわかった。

#### ・参考文献

成海住子2008 「槇松遺跡第10次調査(UM2006-10)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告113』財團法人八尾市文化財調査研究会



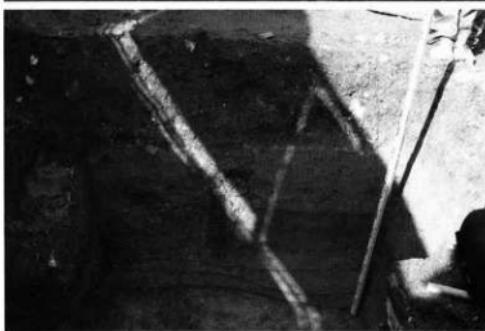
第5図 3区断面図



第6図 4区断面図



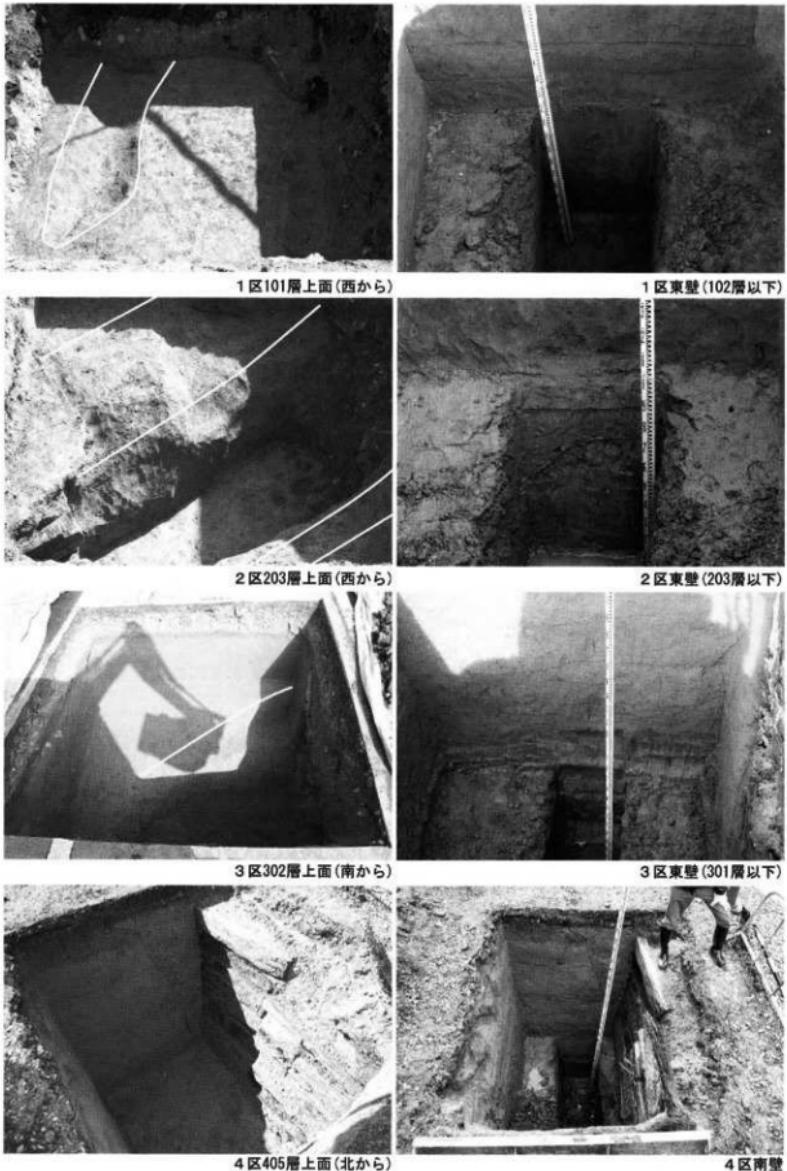
6層上面(東から)

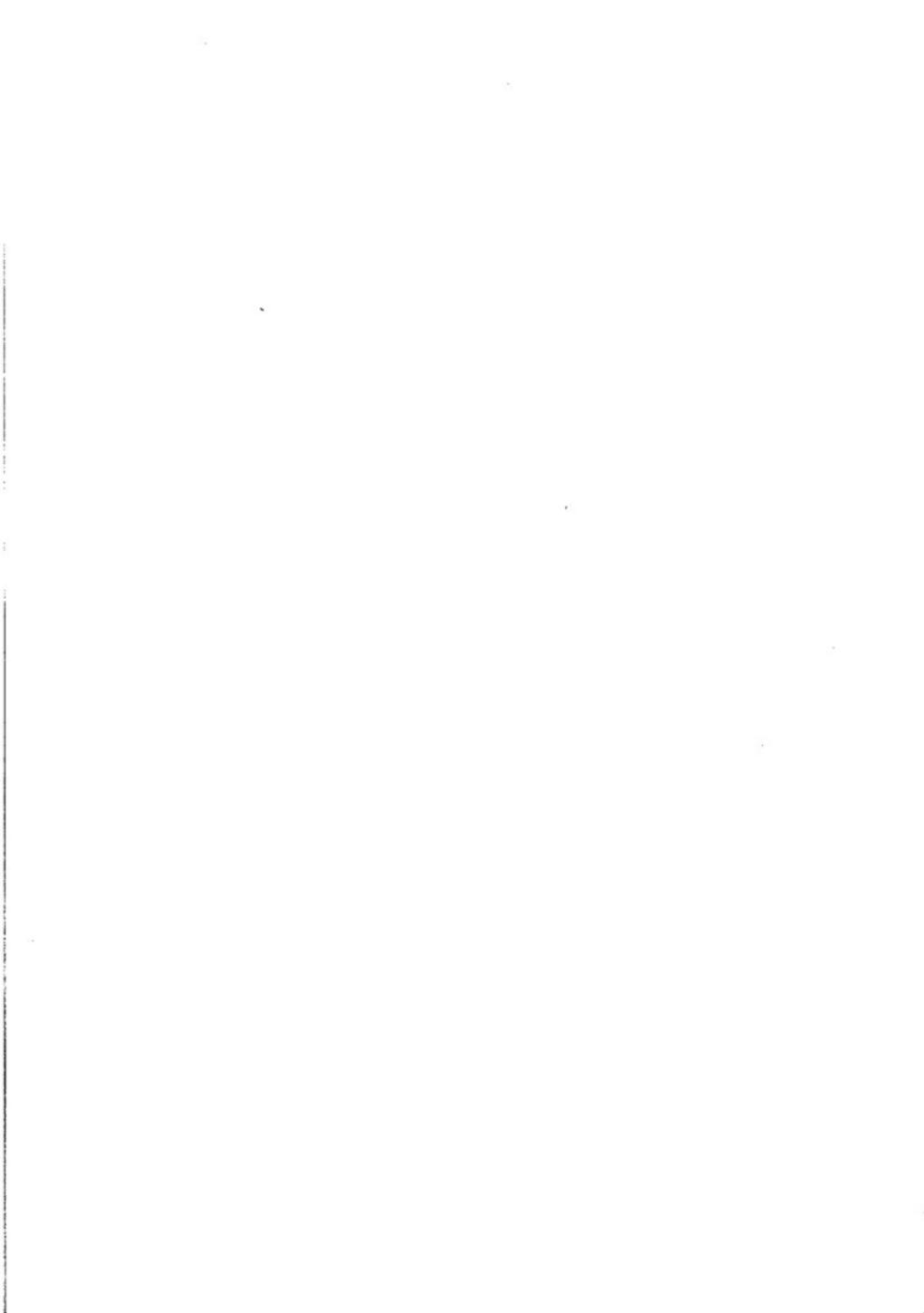


西壁



下層確認(東から)





## II 大竹遺跡第2次調査(OT2010-2)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市水越8丁目地内で実施した市道高安第9号線路側整備工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する大竹遺跡第2次調査(OT2010-2)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成23年1月25日～1月27日(実働3日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約15m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査・内業整理業務においては、梶本潤二・芝崎和美の参加を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後随時実施し、平成23年3月に完了した。
1. 本書の執筆・編集は坪田が行った。

## 本　文　目　次

1.はじめ	11
2.調査概要	12
1) 調査の方法と経過	12
2) 基本層序	12
3) 検出遺構と出土遺物	12
3.まとめ	12

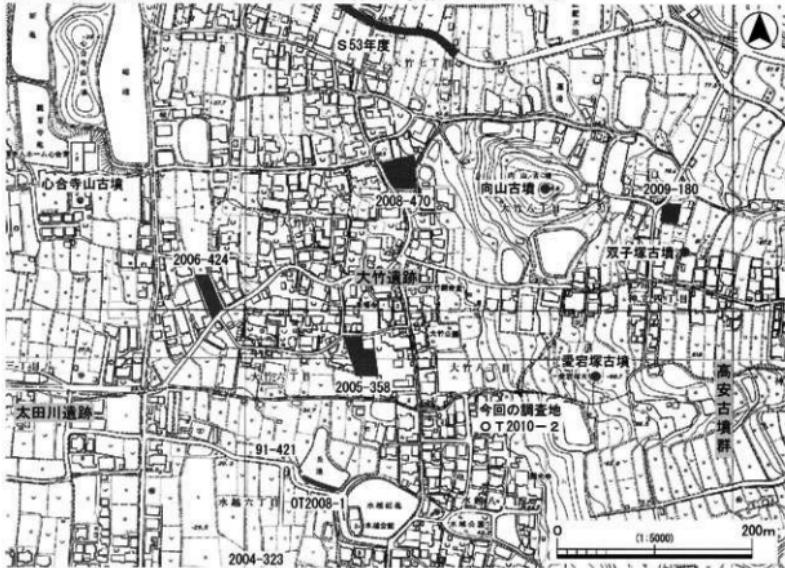
## II 大竹遺跡第2次調査(OT2010-2)

### 1. はじめに

大竹遺跡は大阪府八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では大竹6～8丁目、水越6・8丁目、神立3・4・6丁目の一部を含む遺跡で、東西約500m、南北約600mの範囲に広がる。

地理的には生駒山地西麓の扇状地に位置し、北に花岡山遺跡、東に高安古墳群、南に水越遺跡、西に心合寺山古墳・大竹西遺跡・太田川遺跡が接する。また遺跡東部は高安古墳群の一画である樂音寺・大竹古墳群にあたり、前期の向山古墳や、後期の愛宕塚古墳、双子塚古墳などが遺跡内に存在している。向山古墳の乗る丘陵南斜面には平安時代の向山瓦窯跡が存在する。

当遺跡内では昭和初期以降、縄文時代に遡る石器が採集されていたが、最初に考古学的な発掘調査が実施されたのは昭和53(1978)年度のことである。この調査は花岡山遺跡との境界となる遺跡北端の道路上で実施された水道管布設に伴うものであった。調査では弥生時代後期の土器が大量に出土した大溝をはじめ、古墳時代の遺物包含層等が確認されている。それ以降は小規模な遺構確認調査が数件実施されている程度であり、顯著な遺構・遺物は確認されていないため、遺跡の実態は不明な点が多いといえる。ただし古墳についての調査は実施されており、中期の心合寺山古墳は史跡整備に伴う調査や周囲の池(周濠)の改修に伴う調査がなされ、北・中河内最大の全長160mを測る古墳の実像が明らかとなっている。また後期の愛宕塚古墳では発掘調査がなされ、府下最大級の横穴式石室からは馬具等の副葬品が多数出土している。



第1図 調査地位置図

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は市道高安第9号線路側整備工事に伴う調査で、当調査研究会が大竹遺跡内で行った第2次調査(OT2010-2)である。

工事は市道高安9号線がカーブする部分の内側に擁壁を設置するものである。幅約1.6m、延長約16mにわたる掘削を伴う工事区間の内、長さ約3.0mの調査区3箇所(西から1~3区)を設定し、調査を実施した。総面積は約15m<sup>2</sup>である。

調査は、道路面以下約1.0~1.7mまでを機械・人力掘削併用で実施した。道路際を垂直に掘削するため直後に土留めを設置する必要があり、調査に際しては道路際に法面を設定して掘削し、その法面を断面観察の対象とした。平面・断面の調査完了後、法面の掘削についても立会い、調査を完了した。

平面図は工事図面を使用した。

標高的基準は、調査地西部に位置する八尾市街区補助点〈3A412:T.P.+49.678m〉を使用した。

### 2) 基本層序

現地表面である道路面の標高はT.P.+52.6~53.7mを測り、道路のカーブ地点である2区が最も高くなっている。0層は全域で見られた表土層で、締まりの悪い層相である。上面はアスファルト(厚さ約5cm)である。1層は3区で見られたシルト~細粒砂層で、水成層である。洪水起原と考えられる。2層は全域で見られた砂礫層(岩盤)で、いわゆる地山層である。現地表面に沿う形で2区東部が最も高く、また北・東に向かってさらに高くなる状況である。

### 3) 検出遺構と出土遺物

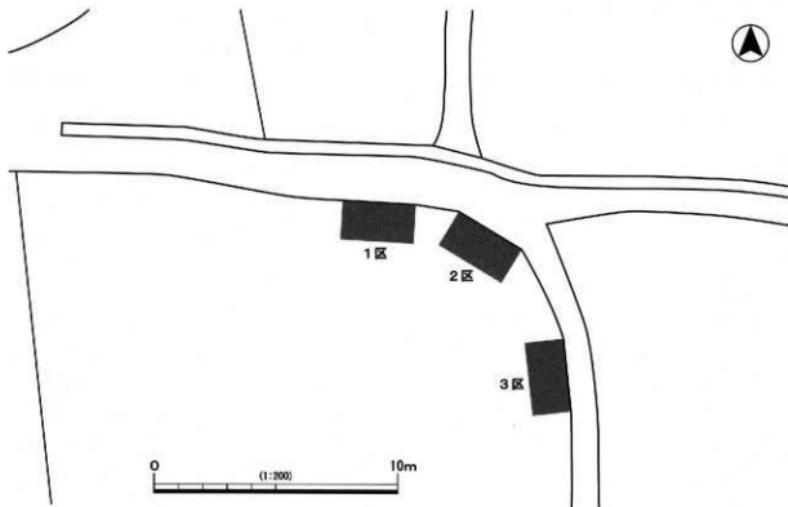
遺構・遺物共に検出されなかった。

## 3. まとめ

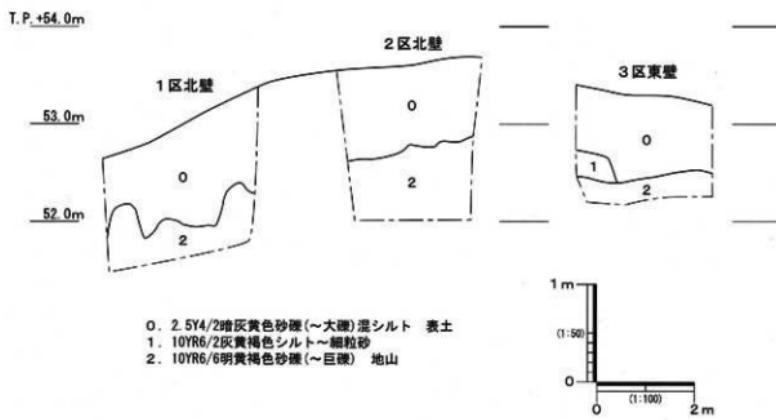
今回の調査では、表土層直下が地山層であることを確認した。調査地は生駒山地西側の西に延びる丘陵上にあたり、東約80m地点には後期古墳である愛宕塚古墳が構築されている。調査地点である道路カーブ地点の現況は隆起していたため、古墳の存在も想定されたが、地山面の高まりに沿うもので、墳丘盛土や遺構等は認められなかった。

## 参考文献

- ・村川行弘1980『河内 大竹遺跡 - 八尾市水道局低区第3配水池送配水管布設用地内埋蔵文化財発掘調査報告 -』八尾市教育委員会
- ・安井良三1994『河内愛宕塚の研究』八尾市立歴史民俗資料館
- ・吉田野乃織2001『史跡心合寺山古墳発掘調査概要報告書 - 史跡整備に伴う発掘調査の概要 -』八尾市文化財調査報告45 史跡整備事業調査報告2』八尾市教育委員会
- ・木村健明2009『I 大竹遺跡第1次調査(OT2008-1)』『財団法人八尾市文化財調査研究会報告128』財团法人八尾市文化財調査研究会



第2図 平面図



第3図 断面図



調査地全景(西から)



1区調査状況(北東から)



1区全景(西から)



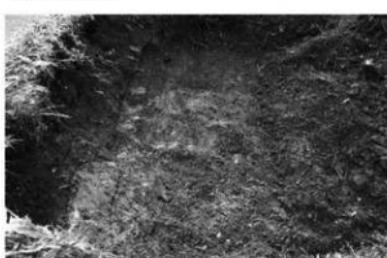
1区北壁



2区全景(西から)



2区北壁



3区全景(北から)



3区東壁

### III 水越遺跡第10次調査(MK2009-10)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市水越七丁目地内で実施したトンボ池改修工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する水越遺跡第10次調査（MK2009-10）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成22年1月12日～1月19日（実働6日）に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約95.3m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査・内業整理業務においては、梶本潤一・田島宣子・西出一樹の参加を得た。
1. 本書作成に関わる内業整理業務は、遺物実測・飯塚直世・市森千恵子・村井俊子、遺物トレー スー市森が行った。
1. 整理業務は、現地調査終了後隨時実施し、平成23年3月に完了した。
1. 本書の執筆・編集は坪田が行った。

## 本　文　目　次

1.はじめに.....	15
2.調査概要.....	16
1) 調査の方法と経過.....	16
2) 基本層序.....	17
3) 検出構造と出土遺物.....	18
3.まとめ.....	20

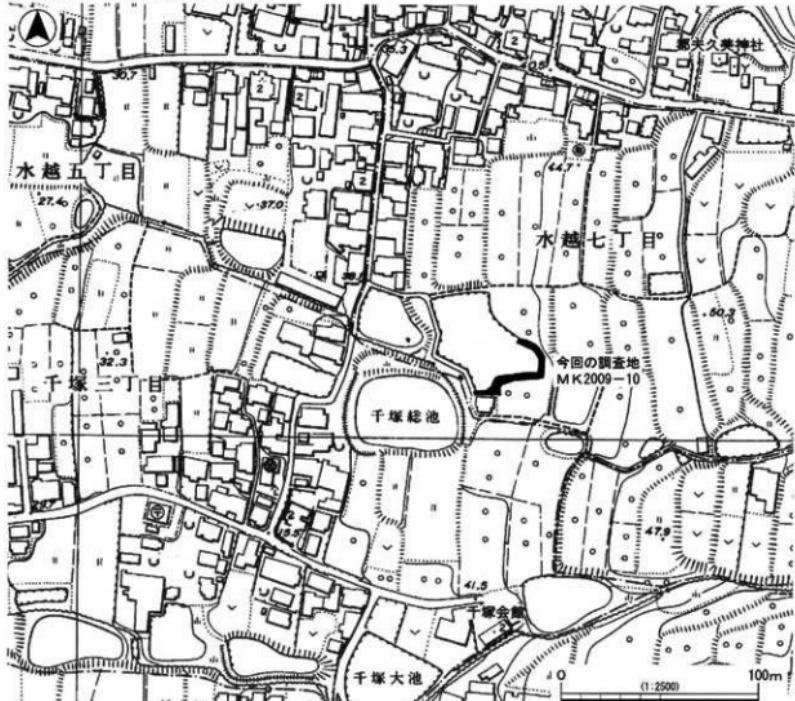
### III 水越遺跡第10次調査(MK 2009-10)

## 1. はじめに

水越遺跡は大阪府八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では水越・千塚・大窪・服部川一帯の約1.2km四方がその範囲とされている。地形的には生駒山西麓から河内平野に続く扇状地上に立地し、西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で太田川遺跡・大竹遺跡、南側で郡川遺跡に接しており、東側には高安古墳群が広がっている。

当遺跡内では、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により数次の発掘調査が行われている。これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代中期～近世にわたる複合遺跡であることが認識されている。

今回の調査地は遺跡北東部に当たり、周辺ではこれまであまり発掘調査は行われておらず、遺跡の様相が不明な地域といえる。



### 第1図 調査地位置図

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

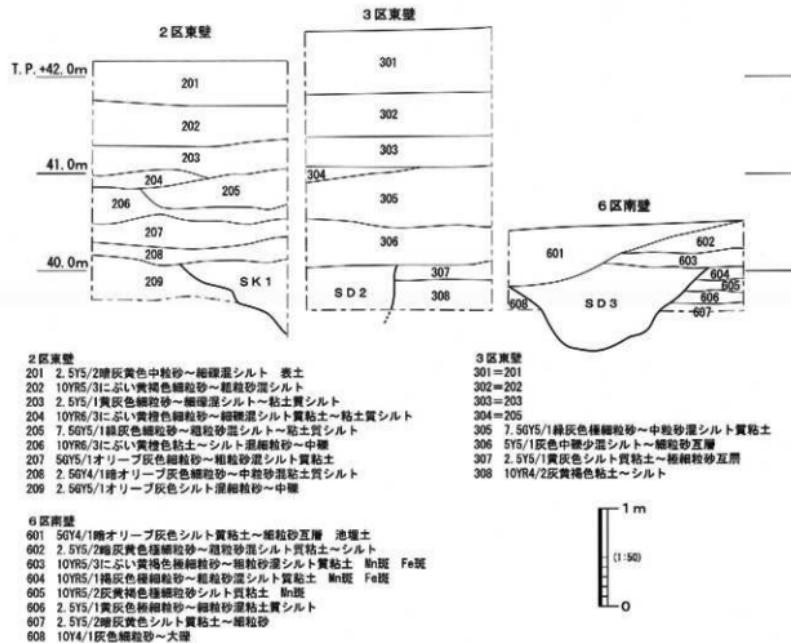
今回の調査は溜池であるトンボ池改修工事に伴う調査で、当調査研究会が水越遺跡内で行った第10次調査(MK 2009-10)である。

調査区は池の周囲の東部～南部に沿うもので、幅約1.5m、延長約63.5mの不定形な細長いトレンチ状を成す。地区割りは調査区の形状に合わせて北から1～6区を設定し、1区から調査を実施した。掘削は、池底に当たる現地表(約T.P.+40.6～40.8m)下約0.5mまでを機械掘削し、以下は人力掘削により調査を行った。

標高の基準は、調査地西部に位置する八尾市街区多角補助点〈A117: T.P.+43.003m〉を使用した。また平面実測の基準は任意に設置した杭を基準とした。



第2図 調査区位置図



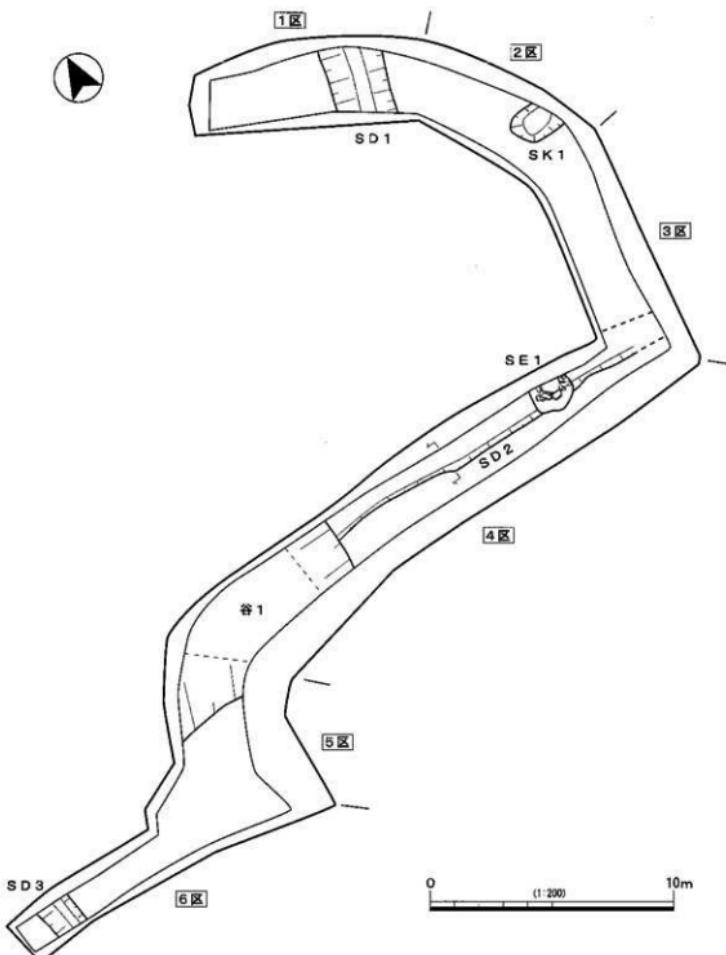
第3図 断面図

## 2) 基本層序

2・3・6区の壁面を基本層序とする。

2・3区東壁では、201～205層、301～304層は池の堤として盛られた土層と考えられる。以下には細粒砂～中疊を多く含む湿润な水成層が続くが、1・4・5区も同様の状況であった。

6区では、603～605層がMn斑・Fe斑を多く含む土壤化層で、西部でのみ見られた。



第4図 平面図

### 3) 検出遺構と出土遺物

標高T.P. +40.0~40.1m、1~5区では水成層上面、6区では604層上面で、井戸1基(S E 1)、土坑1基(S K 1)、溝3条(S D 1~3)、及び谷状地形(谷1)を検出した。

#### S E 1

4区東部で南半分を検出したもので、石組み井戸である。井戸枠は自然石を円形に組み上げたもので、内径約70cmを測る。底までの掘削は実施しておらず、深さ等は不明である。遺物は枠内(1層)から梢円形の板材(1)が出土した。縁辺のうち短軸方向の一方が長さ約3cmに亘って直線をなす。法量は長径14.1cm・短径12.8cm・厚さ約6mmを測る。用途としては、周縁に釘孔等が見られないこと、また断面形状がやや台形を呈することから勘案して、はめ込み式の柄杓の底板等が考えられよう。なお当井戸はS D 2を削平して構築されており、時期は室町時代頃と考えられる。石組み井戸としては八尾市域では同様に生駒山西麓部に位置する郡川遺跡、神宮寺遺跡に類例がある。

#### S K 1

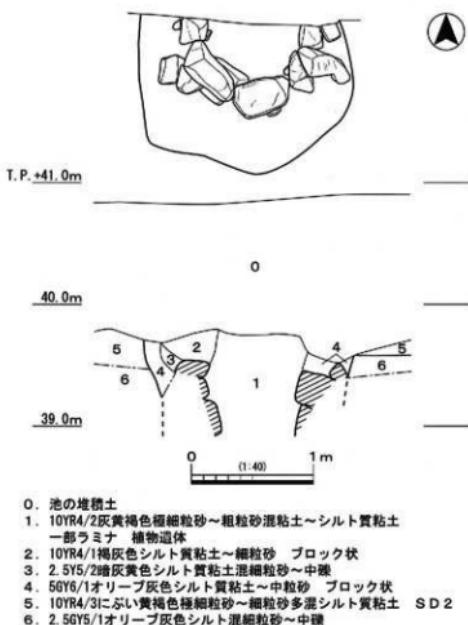
2区で西部を検出したもので、規模は東西2.0m以上・南北約1.5m・深さ約0.9mを測る。埋土は細粒砂～巨礫(~30cm)で、土石流による埋没と考えられる。遺物は出土していない。

#### S D 1

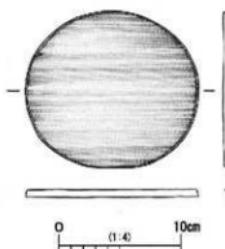
1区で検出した北東～南西方向の溝で、検出部分の幅約2.5m、深さは約30cmである。北壁によると、東から西に下がる段差約80cmの落ち込み状の堆積が認められ、その底部にあたる。埋土は上部がシルト～極粗粒砂互層、下部が粘土～シルト互層で、下部には巨礫が多く含まれている。遺物は出土していない。性格は不明であるが、層位的にみて時期は近世である。

#### S D 2

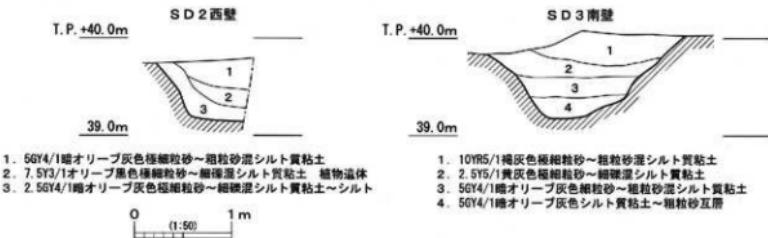
3~4区で検出した東西方向に直線的に延びる溝で、南肩を確



第5図 S E 1 平断面図



第6図 S E 1 出土遺物



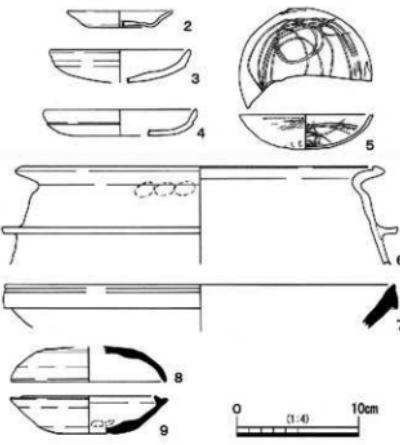
第7図 SD 2・3断面図

認した。検出長約16m・幅1.1m以上・深さ約0.6mを測る。埋土はシルト質粘土基調の3層からなり、あまり流水状況にはなかったようである。

遺物は12~15世紀頃の土師器、瓦器、東播系須恵器の他、飛鳥時代の須恵器も出土している。2~9を図化した。2~4は土師器皿である。3・4の口縁部にはヨコナデによる段が明瞭に生じている。4は口縁部の一部が煤けており、灯明皿であろう。2が15世紀代、3・4は12~13世紀に比定されよう。5は高台の消失した瓦器碗で、内面の暗文は一連の渦巻き状である。13世紀末~14世紀初頭に比定される。6は口縁端部を巻き込む大和型の土師器羽釜である。14世紀代に比定される。7は東播系須恵器鉢で、12~13世紀に比定されよう。8・9は須恵器杯蓋・杯身で、飛鳥時代初頭に比定される。9の底部外面には自然軸が掛かる。

### SD 3

6区で検出した南北方向の溝で、検出長約1.2m・幅約1.5m・深さ約0.8mを測る。埋土は4層から成り、最下層がシルト質粘土～極粗粒砂の互層、上層は極細粒～細礫混シルト質粘土である。遺物は15世紀末頃までの土師器(皿・羽釜等)、瓦器(三足釜)、陶器(常滑焼?)が出土しており、10・11



第8図 SD 2出土遺物



第9図 SD 3出土遺物

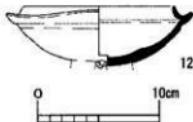
を図化した。共に瓦器で、10は羽釜、11は三足釜である。10は鋸端部に凹線が巡る。14~15世紀に比定される。

#### 谷1

4・5区で検出した南から北に延びる谷状地形である。ブロック層により埋められており、その後、池の堤が盛土されている。

#### 3区306層出土遺物

12は須恵器有蓋高杯の杯部で、歪みが大きい。脚部のスカシは2方向である。6世紀末に比定される。二次堆積の遺物であるが、当地が高安古墳群に近接することから勘案して、本来古墳の副葬品であったのかもしれない。



第7図 3区東壁出土遺物

#### 4.まとめ

今回の調査では、中世末~近世初頭の井戸・溝等が検出され、当地に当該期の集落が存在していたことを確認した。6区西端では土壤化の著しい層位が見られ、集落域はさらに西に広がるものと考えられる。1~5区では洪水により遺構面が削平されている可能性がある。

なお中世末に比定されるSD2には飛鳥時代の須恵器が含まれており、付近にこの時期の集落が存在する可能性がある。

#### 註

- ・岡田清一1997「Ⅲ 神宮寺遺跡(第1次調査)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告57」財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則1999「Ⅲ 郡川遺跡(第2次調査)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告64」財団法人八尾市文化財調査研究会



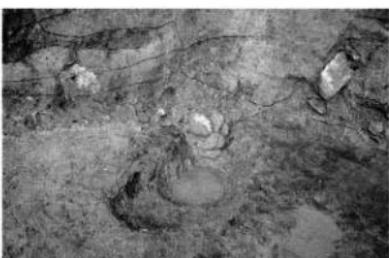
調査地(西から)



1区機械掘削(西から)



SD 1(南から)



SK 1(南から)



SE 1(南から)



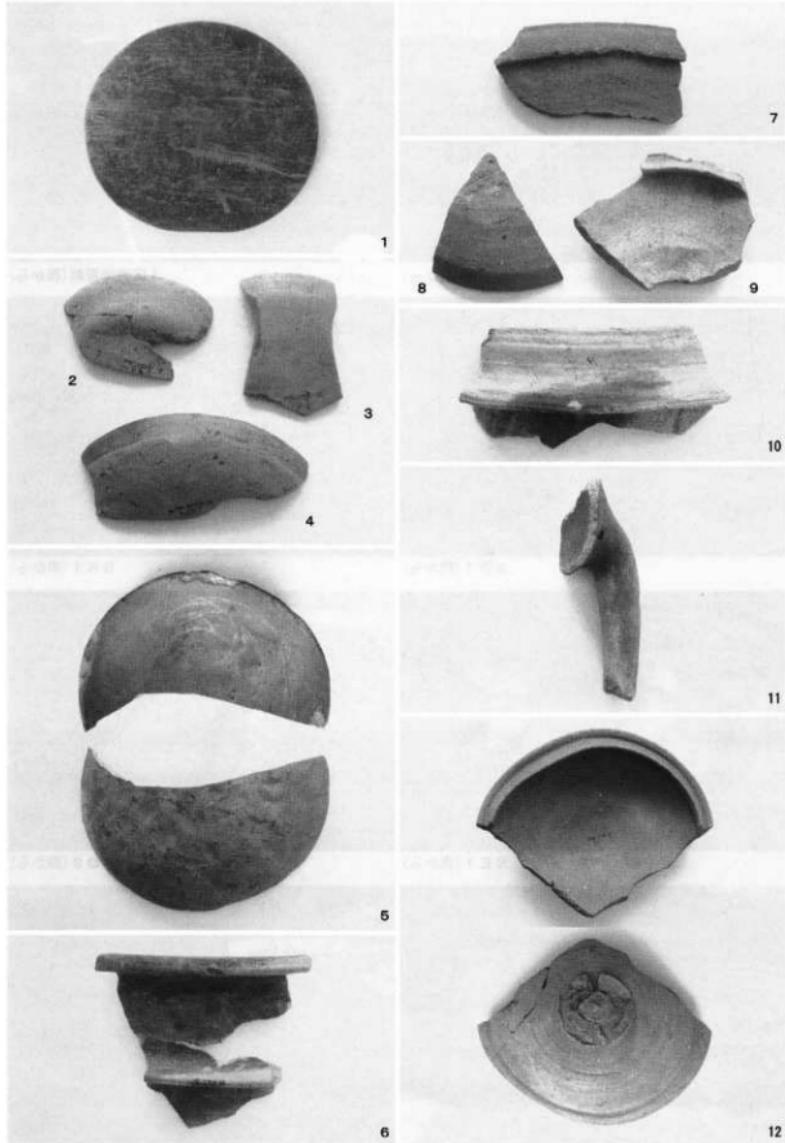
SD 2(西から)



SD 3(北から)



4区調査状況(西から)



SE 1(1)、SD 2(2~9)、SD 3(10~11)、3区306層(12)

IV 八尾南遺跡第34次調査（Y S 2009-34）

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市西木の本四丁目地内で、市営大正住宅集会所建替えに伴い実施した八尾南遺跡第34次調査(YS 2009-34)の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
  1. 調査は当調査研究会 成海佳子が担当した。
  1. 現地調査は、平成22年3月8日に着手し、3月30日に終了した(外業実働11日)。調査面積は約136m<sup>2</sup>である。
  1. 現地調査には、市森千恵子・芝崎和美・田島宣子・村井俊子の参加を得た。
  1. 内業整理は現地調査終了後に着手して平成22年7月12日をもって終了した。  
　　遺物実測－市森・村井・山内千恵子、トレース－山内
  1. 本書の執筆・編集は成海が行った。

## 本　文　目　次

1.はじめ	·23
2.調査概要	·25
1) 調査方法と経過	·25
2) 基本層序	·25
3) 検出遺構と出土遺物	·25
3.まとめ	·29

## IV 八尾南遺跡第34次調査(Y S 2009-34)

### 1. はじめに

八尾南遺跡は大阪府八尾市南西部に位置している。現在の行政区画では若林町一～三丁目、木本の木一～四丁目の西部にあたり、東西約0.5km、南北約1.3kmがその範囲とされている。

地理的には旧大和川及びその支流河川による活発な沖積作用によって形成された河内平野の南西部にあたる。地質的には概ね沖積地であるが、遺跡の南には羽曳野丘陵から連なる河内台地が、西には上町台地が存在しており、台地から低地への地形変化点にもなっている。

周辺には、北東に木の木遺跡、南東に太田遺跡、市境を挟んで北部から西部にかけては長原遺跡等の遺跡が隣接している。当遺跡は、長原遺跡で行われた地下鉄建設が発見の契機になっており、これを受けて行われた八尾南遺跡調査会による発掘調査が端緒となっている。調査の結果、当遺跡が長原遺跡とともに、旧石器時代～中世にかけての複合遺跡であることが明らかとなり、その後、八尾南駅南側を中心に大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター・八尾市教育委員会・当調査研究会によって断続的に発掘調査が行われている。

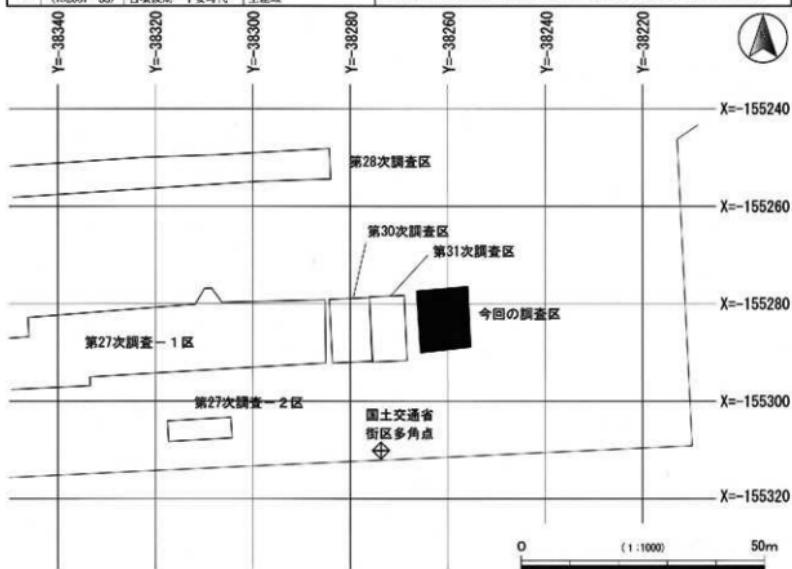
今回の調査地は遺跡の北部にあたり、近辺では、平成12(2004)年度から八尾市営住宅建替えに伴う一連の事業に伴う発掘調査を行っている(第1図-⑪～⑯)。これらの調査地では、古墳時代～近代までの居住域や生産域、河川等が検出されている。



第1図 調査地周辺図

第1表 調査地一覧表（第1図に対応）

番号	遺跡名(略号)	主な時代	種別	文献
①	八尾南遺跡	旧石器～唐文時代 弥生～後古代	？ 生産域・墓域・居住域	赤田敏哉他1981「八尾南遺跡－大阪市高池電気軌道2号線建設に伴う発掘調査報告書－」八尾市遺跡調査会
②	長原遺跡	古墳時代	墓域・居住域・生産域	永島耕三他1982「大阪市平野区長原遺跡発掘調査Ⅱ」長原遺跡調査会
③	長原遺跡 (NG82-26)	縄文時代 平安時代	自然河川 生産域	(財)大阪市文化財協会1982「近畿財團局公務員宿舎に伴う長原遺跡発掘調査(NG82-26)報告」
④	八尾南遺跡	古墳中期 平安	墓域・生産域	赤田敏哉1983「八尾南遺跡(西木の丁目11番地)」(財)八尾市文化財調査研究会報告2
⑤	八尾南第3次 (TS84-03)	古墳時代 平安時代	生産域・居住域 生産域	單田昌則1985「I.八尾南遺跡(第3次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告6
⑥	八尾南第6次 (TS86-06)	古墳～平安時代	生産域？	西村公助1987「I.八尾南遺跡(第6次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告14
⑦	八尾南第7次 (TS86-07)	古墳時代 平安～縄文時代	生産域 生産域	西村公助1987「II.八尾南遺跡(第7次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告41
⑧	八尾南第10次 (TS87-10)	古墳時代 平安時代	生産域・居住域 生産域	成瀬信子1988「II.八尾南遺跡(第10次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告16
⑨	八尾南第18次 (TS92-18)	古墳時代	居住域	島田昌則2008「八尾南遺跡第18次発掘調査報告書」(財)八尾市文化財調査研究会報告17 (財)八尾市文化財調査研究会報告117
⑩	八尾南第19次 (TS93-19)	弥生時代 古墳時代	？ 居住域	内村公助1994「I.八尾南遺跡(第19次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告43 (財)八尾市文化財調査研究会報告43
⑪	八尾南第26次 (TS2004-26)	古墳時代 平安時代	生産域 生産域	高森千秋2005「II.八尾南遺跡(TS2004-26)の調査」八尾市立歴史文化財調査センター報告6
⑫	八尾南第27次 (TS2005-27)	古墳時代 平安～古墳	？ 生産域	島田昌則2007「八尾南遺跡(第27次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告102 (財)八尾市文化財調査研究会報告102
⑬	八尾南第28次 (TS2006-28)	奈良～平安時代 平安～中世	居住域 生産域・河通	成瀬佳子2007「八尾南遺跡(第28次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告114
⑭	八尾南第30次 (TS2007-30)	古墳時代 平安～近世	？ 生産域	赤井友美2009「八尾南遺跡(第30次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告121
⑮	八尾南第31次 (TS2007-31)	古墳時代以前 飛鳥～近代	自然河川 生産域	赤井友美2009「III.八尾南遺跡(第31次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告128 (財)八尾市文化財調査研究会報告128
⑯	八尾南第33次 (TS2007-33)	古墳中期 古墳後期～平安時代	集落域 生産域	西村公助2010「III.八尾南遺跡(第33次調査)」(財)八尾市文化財調査研究会報告131



第2図 調査区位置図

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は市営大正住宅集会所建設に伴う調査で、当調査研究会が八尾南遺跡内で行った第34次調査である。調査対象は建物部分(面積約134nf)で、現地表(T.P.+10.1~10.3m)下1m前後を重機による掘削、以下の0.5mを人力による掘削、さらに0.3~0.4mを重機による二次掘削、さらに0.1~0.2mについて人力掘削を行った。座標は国土座標第VI系(世界測地系)を使用した。高さの基準は八尾市街区多角点20C32(調査地北約100m地点:T.P.+10.005m)を使用した。

### 2) 基本層序

調査区全域は擾乱が多く、西壁北半分~北壁、西壁南部~南壁には、深さ2m以上に及ぶものがあった。

0層: 盛土。層厚1m前後を測る。

1層: 青灰色礫混粘土質シルト。旧耕土、層厚は調査区南部で0.2m前後が遺存する。

2層: 灰褐色粘土質シルト。床土、層厚は0.2m前後を測る。この層上面が第1面である。上面の標高は9.6m前後を測る。

3層: 灰色極細粒砂・褐色砂質シルトのブロック。層厚0.1~0.2m。

4層: 灰色礫混粘土質シルト。層厚0.2m前後。この層上面が、河川N R301の最上層とともに第2面である。上面の標高は9.3m前後を測る。

5層: 暗灰色礫混粘土質シルト。層厚0.2m前後。この層上面が第3面で、上面の標高は8.8m前後である。

6層: 灰色粗粒砂。層厚0.1~0.3m。河川埋土・洪水砂と考えられる。

7層: 灰色粘土質シルト。層厚0.1m程度までを確認した。この層上面が第4面で、上面の標高は8.8m前後である。

### 3) 検出遺構と出土遺物

第1面では近世~近代の土坑や溝が検出されたが、第2面以下はすべて河川であった。

#### 〈第1面〉

2層灰褐色粘土質シルト上面で土坑2基(S K101・102)、溝3条(S D101~103)、河川1条(N R101)を検出した。



第3図 断面図

**S K101**：調査区北西部で検出した。西側は搅乱によって切られているが、おおむね楕円形を呈する。埋土は①青灰色極細粒砂の互層に青灰色粘土のブロック・②灰色極細粒砂からなり、底には植物繊維が敷かれている。直上には板材2枚が間隔をあけて「二」の字状に並べられ、さらにその上に板材3枚が直交して並べられている。上層からは不明木製品1～4が出土している。1は現状で半円形を呈するが、下端は欠損している。上部の中央向かって左寄りに上面から孔が穿たれてい る。その形態から下駄とも考えられるが、木取が横方向である。2～4は類似する小型の板で、一面に小孔が穿たれている。3枚並んで出土したこ とから、何らかの部品と思われる。

**S K102**：調査区北西部、S K101の南に接して検出した。東西に長い長方形である。埋土は灰色極細粒砂に褐色粘土のブロック、遺物は出土していない。

**S D101**：調査区中央南寄りで検出した。東から西に伸びる溝である。埋土は暗灰色粘土のブロック、遺物は出土していない。S D102・103を切る。

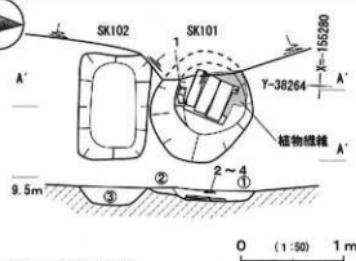
**S D102**：調査区中央で検出した。S D101に直交し、南から北に伸びる溝で、S D101・N R 101に切られる。埋土は灰色粗粒砂に青灰色粘土のブロック。時期不明の土師器小片が若干出土した。

**S D103**：調査区中央西寄り、S D101・102の交点北西で検出した。東南東から西北西へ伸びる。埋土は灰色粗粒砂、遺物は出土していない。

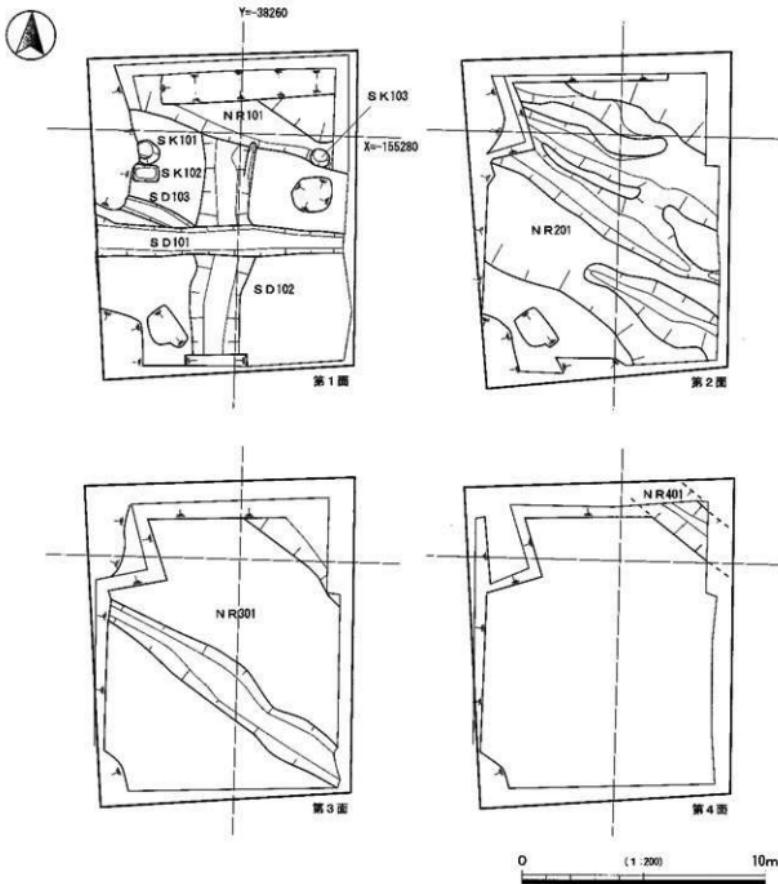
**N R101**：調査区北部で南の岸を検出した。東南東から西北西へ伸びる。調査区内での深さは1mに達し、二段の肩を持つ。埋土は灰色系の粘土を主とし、極細粒砂との互層からなる。最上層は近～現代の搅乱に一致している。内部からは、古墳時代以降平安時代・中世・近世～近代の雑多な遺物が出土している。そのうち図示したものは板5・磁器碗6である。5は現状で半円形を呈し、一部に目釘が遺存する。柄杓等の曲物の底であろう。6は丸文を配する肥前系の碗である。

第2表 検出遺構一覧表

遺構名	法量(m)			形状・方向	埋土
	長辺	短辺	深さ		
S K101	1.1	0.9	0.1	北西→南東に長い楕円形	青灰色極細粒砂の互層に青灰色粘土のブロック 灰色極細粒砂
S K102	1.0	0.9	0.18	東西に長い長方形	灰色極細粒砂に褐色粘土のブロック
S D101	10.0	1.6	0.4	東→西	青灰色粘土のブロック
S D102	9.8	2.2	0.5	南→北	灰色粗粒砂に青灰色粘土のブロック
S D103	3.0	0.7	0.1	南東→北西	灰色粗粒砂
N R101	10.0	3.0以上	1.0	南東→北西	暗灰色疊混粘土質シルト 暗灰色粘土 灰褐色粘土質シルトと極細粒砂の互層 灰褐色疊混粘土質シルト 灰褐色粘土質シルトと極細粒砂の互層
N R201	12.0	11.0以上	0.5	南東→北西	黄褐色細粒砂～粗粒砂、灰色砂質シルト～極細粒砂・淡褐色粗粒砂～釋、暗灰色疊混粘土質シルトの互層
N R301	12.0	10.0以上	0.5	南東→北西	黄褐色粗砂～釋、暗褐色粘土質シルトの互層
S D401	6.0	2.0	0.15	南東→北西	暗灰色粗粒砂～釋



第4図 S K101・102平面面図



第5図 平面図

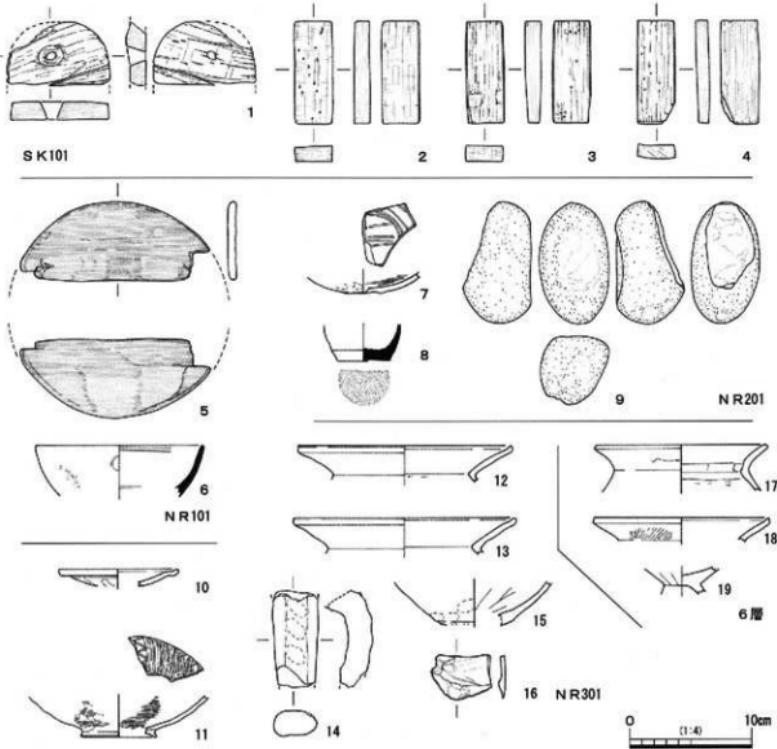
## 〈第2面〉

4層灰色礫混粘土質シルト上面で河川1条(NR201)を検出した。4層は調査区南西部で島畠状に高まっていたことから、当初北東側に水田のあることを想定したが、高まり部分はNR201の肩となっていることが判明した。調査区内での深さは0.5m程度、南東から北西に流下している。川底には凹凸があり、緩やかに北東下がりとなっていることから、河川の氾濫によって水田面が削られた可能性も考えられるが確証は得られなかった。埋土は粘土質シルト～極細粒砂～細粒砂

～粗粒砂～礫の互層である。内部からは古墳時代の須恵器のほか、平安時代以降の土師器、黒色土器、瓦器などが出土している。図示したものは瓦器榤7、須恵器小型壺8、敲石9である。7は形骸化した高台を持つ終末期の瓦器榤である。8は底に回転糸切り痕を持つ。9は砂岩製で、下端に使用痕が残る。弥生時代のものであろう。

### 〈第3面〉

5層暗灰色疊混粘土質シルト上面で河川1条(NR301)を検出した。調査区内での深さは0.5m程度、NR201とほぼ同じ流路方向である。埋土は粘土質シルト・粗粒砂～礫である。内部からは弥生土器、庄内式土器、土師器、瓦器のほか獸骨等が出土している。図示したものは土師器小皿10、瓦器榤11、庄内壺12・13、弥生土器把手14・底部15、サスカイト剥片16である。10は「て」の字形の口縁部を持つ。11は大型の高台を持ち密なヘラミガキを施す。12・13はいわゆる庄内式壺で、口縁端部のつまみ上げ・口縁屈曲部の稜はともに鈍い。14は弥生土器の大型の器種の把手部分で、接合部から剥落している。縦位の把手で、手づくね成形時の指圧痕が顕著に残る。15は



第6図 出土遺物実測図

弥生時代終末の壺・鉢底部と考えられ、底部の周縁にはヘラケズリが施されている。16は一辺に押圧剥離により刃部が作られている。

#### 〈第4面〉

7層灰色粘土質シルト上面で溝1条(S D401)を検出した。調査区北東隅で検出した溝で、流路方向はN R201・301と同じく南東から北西である。北側の肩には堤状のブロック層や杭が見られたが、調査区北東角に一致しているため、明確に固化できなかった。埋土は暗灰色粗粒砂～礫、遺物は出土していない。

#### 〈6層出土遺物〉

第4面を覆う6層からは、庄内式壺17・18、小型器台19が出土した。いずれも小破片である。

### 3.まとめ

今回の調査では、既往調査同様、古墳時代から近世・近代に至るまでの4面の遺構面を検出することができた。

・第1面では、東西に伸びる溝(S D101)、南北に伸びる溝(S D102)が検出されたが、これらは近世の区画溝と考えられる。河川(N R101)は、その方向や埋土から、第28次調査地河川1と同一のものと考えられ、当地が軍用地として開発される直前まで機能していたものと考えられる。

・第2面では、調査区のほぼ全域が河川(N R201)であったが、この河川も北西の延長が第28次調査地河川13に求められる。埋没時期は瓦器碗7から、鎌倉時代末～室町時代前期頃に比定できる。

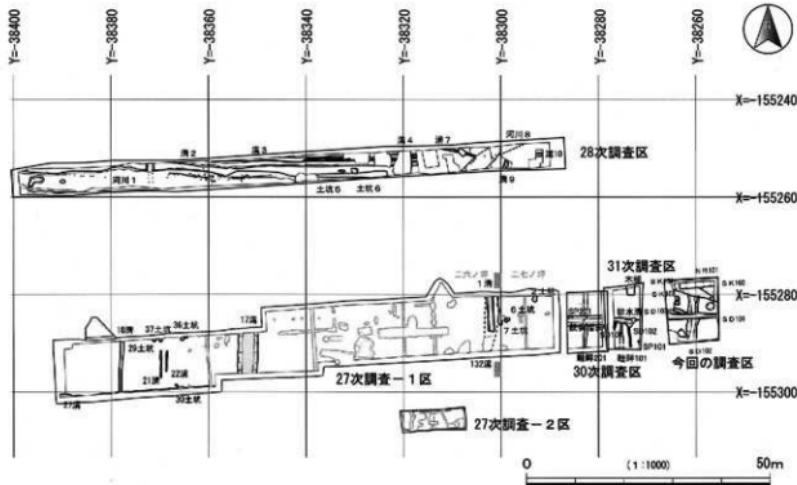
・第3面もN R201と同方向に流れる河川(N R301)である。埋没時期は土師器小皿10・瓦器碗11から、平安時代後期に比定できる。

第3表 出土遺物一覧表

番号	出土地	器 種	法量(cm) 幅×高×厚	備 考
1	S K101	木製品	不明	8.3×5.2×1.5 上面から錐状の工具で円孔(径0.5×0.8cm)を穿つ 横木取
2	S K101	木製品	板	3.1×8.4×1.3 一面に小孔あり 横木取
3	S K101	木製品	板	3.1×8.4×1.3 一面に小孔あり 横木取
4	S K101	木製品	板	3.1×8.5×1.1 一面に小孔あり 縦木取
5	N R101	木製品	曲物底板	15.5×6.4×0.7 目釘遺存
6	N R101	磁器	碗	口 径 (13.4) 九文、口縁内面に團線
7	N R201	瓦器	碗	高台径 (2.8) ヘラミガキは体部粗い横方向・見込み平行、高台は極状
8	N R201	須恵器	小型壺	底 径 4.2 底部回転系切り
9	N R201	砂岩	敲石	5.6×9.9×5.6 一面に使用痕
10	N R301	土師器	小皿	口 径 (9.5) 「て」の字形口縁部
11	N R301	瓦器	碗	高台径 6.0 ヘラミガキは体部密な横方向・見込み斜格子高い
12	N R301	庄内式土器	壺	口 径 (17.3) 口縁端部のつまみ上げ、口縁肩部は鋭い
13	N R301	庄内式土器	壺	口 径 (18.0) 口縁端部のつまみ上げ、口縁肩部は鋭い
14	N R301	弥生土器	把手	8.0×3.7×2.1 手づくね成形
15	N R301	弥生土器	壺・鉢	底 径 (6.1) 底部周縁部をヘラケズリ
16	N R301	サスカイト	剥片	4.8×3.7×0.4 一辺に押圧剥離による刃部あり
17	6層	庄内式土器	壺	口 径 (13.7) 口縁端部はつまみ上げない、口縁部は二段に扁曲する
18	6層	庄内式土器	壺	口 径 (14.2) 口縁端部側面は凹面状
19	6層	古式土師器	小型器台	基部径 3.0

・第4面では、北側の岸に堤状の盛土を持つ溝S D401を検出した。遺構内の出土遺物は無かったが、上層に堆積する6層からは庄内式壺17・18、小型器台19が出土していることから、掘削・埋没時期は古墳時代前期初頭に近い時期が想定できる。

以上のように、当地は近世以前には南東-北西方向の流路の南岸にあたり、北東下がりの地形を呈していることがわかった。また、遺構を検出するには至らなかったが、弥生土器のほか同時代の石器、古墳時代中期の須恵器の出土などもあり、近隣の調査成果とともに多大な成果が得られたと考えられる。



第7図 周辺の調査区平面図（第1面）



調査地近景 南西から



機械掘削状況 南西から



人力掘削状況 南から



第1面検出状況 南東から



第1面全景 南から

図版2



第1面 SK101 東から



同爆削状況 北から



同完爆 上が西



第2面検出状況 南東から



第2面全景 南から



第3面検出状況 南東から



第4面検出状況 南西から



第3面全景 南から



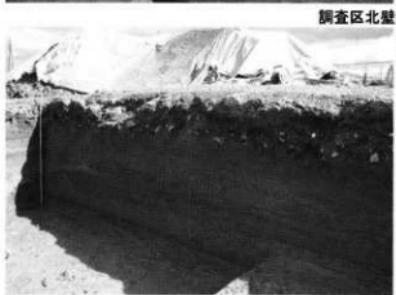
第4面全景 南から



調査区北壁



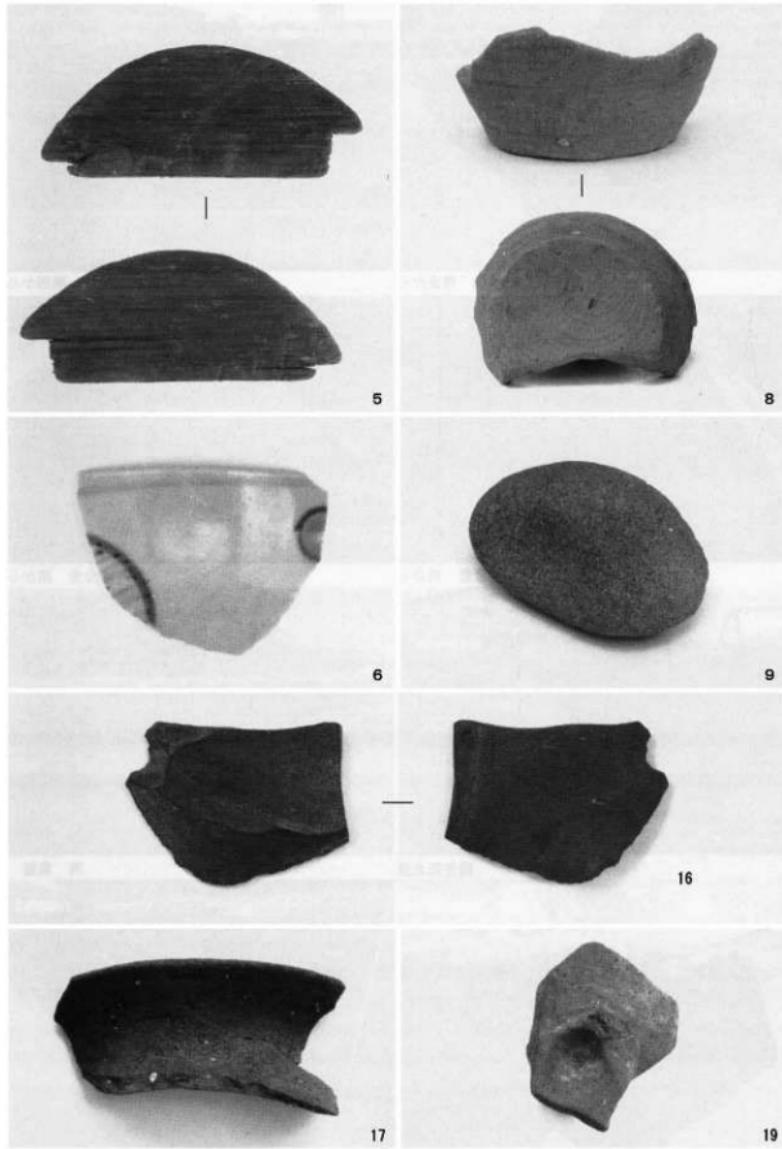
同 東壁



同 南壁



同 西壁



V 八尾南遺跡第35次調査(Y S 2010-35)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市若林町一丁目2で実施したエレベーター設置工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する八尾南遺跡第35次調査(YS 2010-35)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が大阪市交通局から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成22年6月4日～6月7日(実働2日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約16m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査・内業整理業務においては、伊藤静江・田島宣子・永井律子・山内千恵子の参加を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後隨時実施し、平成23年3月に完了した。
1. 本書の執筆・編集は坪田が行った。

## 本　　目　　次

1.はじめ	35
2.調査概要	36
1) 調査の方法と経過	36
2) 基本層序	36
3) 検出構造と出土遺物	36
3.まとめ	38

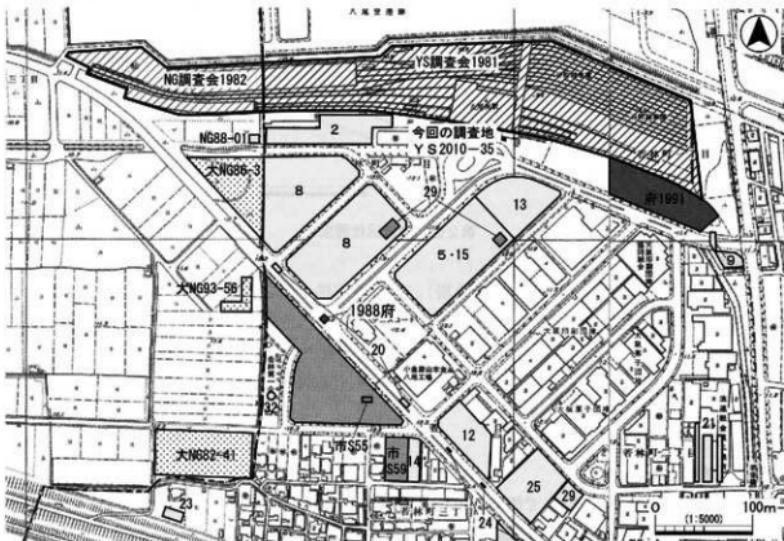
## V 八尾南遺跡第35次調査(Y S 2010-35)

### 1. はじめに

八尾南遺跡は大阪府八尾市南西部に位置している。現在の行政区画では若林町1～3丁目、西木の本1～4丁目の西部にあたり、東西約0.5km、南北約1.3kmがその範囲とされている。周辺には、北東には木の本遺跡、南東には太田遺跡、市境を挟んで北部から東部にかけては長原遺跡等の遺跡が隣接している。地理的には旧大和川及びその支流河川による活発な沖積作用によって形成された河内平野の南西部にあたる。地質的には概ね沖積地であるが、遺跡の南には羽曳野丘陵から連なる河内台地が、西には上町台地が存在しており、低地から台地への地形変化点にもなっている。

当遺跡は、今回の調査地でもある地下鉄八尾南駅建設が発見の契機になっており、これを受けた行なわれた八尾南遺跡調査会の発掘調査が端緒となっている。調査の結果、当遺跡が旧石器時代～中世にかけての複合遺跡であることが明らかとなり、その後、駅南側を中心に大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター・八尾市教育委員会・当調査研究会によって継続的に発掘調査が行われている。

今回の調査地は遺跡北部にあたり、前述の地下鉄八尾南駅建設に伴う発掘調査地の南に近接している。この調査においては特に古墳時代における成果が多大で、居住域・生産域・墓域からなる集落構造を確認している。



第1図 調査地位置図

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の調査は地下鉄八尾南駅南側でのエレベーター設置工事に伴う調査で、当調査研究会が八尾南遺跡内で実施した第35次調査(Y S 2010-35)に当たる。

調査範囲は約 $4.0 \times 4.0$ mの正方形、面積約 $16.0\text{m}^2$ であったが、調査地には約 $4.0 \times 5.2$ mの範囲で鋼矢板が設置されており、実際にはこの範囲を調査している。

調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表(約T.P.+14.5m)下1.8~2.0mを機械掘削し、以下の0.3m前後については人力掘削により調査を実施し、適宜下層確認調査を実施した。なお残土置き場確保のため掘削・埋め戻しを繰り返しながらの調査で、結果的に調査区を4分割しての調査となった。また既設建造物(階段)の基礎杭が存在したため、北西部は一部調査が不可能であった。

調査で使用した標高の基準は、調査地南部約25mに位置する八尾市街区多角点(3級基準点相当)〈20C56 : T.P.+11.484m〉である。



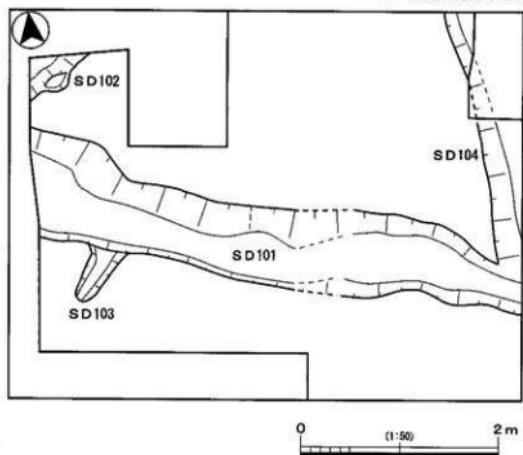
第2図 調査区位置図

### 2) 基本層序

現地表下1.8~2.0mまで盛土・搅乱(0層)。1層は旧耕土。2層は搅拌された作土である。時期不明の土師器片や弥生時代後期の甕片が見られた。3層は土壤化し、やや暗色を呈する。上面が遺構面で、標高は西部でT.P.+9.8m、東部で9.6mと東下がりとなっているが、2層の作土が東ほど深くまで及んでいるためである。4層以下は粘土基調の水成層で、5層細粒砂~中粒砂の薄層は一時的な洪水砂の可能性がある。

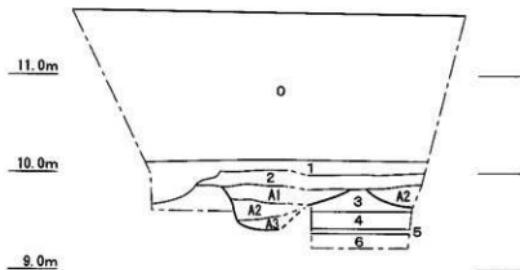
### 3) 検出遺構と出土遺物

3層上面(T.P.+9.8~9.6m)で溝4条(SD1~4)を検出した。なお3層上面に貼り付く状況で平安時代後期に比定される土師器皿が1点(1)出土している。



T.P. +12.0m

西壁



0 : 塵土

1 : 5G3/1暗オリーブ灰色シルト～極細粒砂混粘土質シルト 旧耕土

2 : 2.5G6/1オリーブ灰色シルト質粘土ブロック混シルト～極細粒砂 Fe斑

3 : 10YR6/1褐色灰色シルト～極細粒砂混シルト質粘土 Fe斑

4 : 10YR5/6黃褐色極細粒砂～中粒砂混シルト質粘土 Fe斑極多

5 : 2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂～中粒砂

6 : 2.5Y7/4淡黄色粘土 Fe斑多

SD101～103

A1 : 5G6/1オリーブ灰色シルト～細粒砂互層 (SD103)

A2 : 2.5Y6/4にぶい黄色粘土ブロック混極細粒砂 (SD102)

A3 : 2.5G5/1オリーブ灰色粘土ブロック混細粒砂～中粒砂

SD104

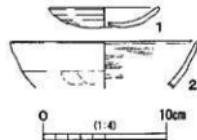
2.5Y6/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土 ブロック状

第3図 平断面図

1は口径9.0cmを測り。口縁部は二段のヨコナデを施している。

#### SD 1

ほぼ東西方向に伸びる溝で、幅1.05~0.9m・深さ約40~20cmを測る。底部や側壁に壅みが多く見られ、埋土は3層からなり、上層はシルト~極細粒砂互層の流水堆積、中・下層も流水堆積で粘土ブロックを多く含む。下層から黒色土器碗(2)・土師器片が各1点出土している。2は口径15.2cmを測るB類の黒色土器碗で、不明瞭であるが内面に細かいヘラミガキ、ハケが確認できる。平安時代後期に比定される。



第4図 SD 1出土遺物

#### SD 2

ほぼ南北方向に伸びる溝で、幅75cm以上・深さ20cm以上を測る。埋土はブロック状の単一層である。南部でSD 1と合流している。遺物は出土していない。

#### SD 3

北西部で一部を確認した遺構で、溝であろう。幅35cm以上・深さ22cm以上を測る。埋土はSD 1の中層と同じである。検出状況から西部でSD 1と合流している可能性が高い。遺物は出土していない。

#### SD 4

SD 1南肩に取り付く溝で、幅約25cm・深さ約15cmを測る。埋土はSD 1上層と同じである。遺物は出土していない。

### 3.まとめ

調査では平安時代頃に帰属すると考えられる溝群を検出した。北側の調査では平安~鎌倉時代の水田耕作とその灌漑に関連する遺構(河道・溝等)が検出されており、これらの遺構群に含まれるものであろう。

これより下層については粘土基調の水成層が確認された。北側調査成果によると、当地は東西の微高地に挟まれた谷状地形にあたっており、生活には適さない環境であったと考えられる。

### 参考文献

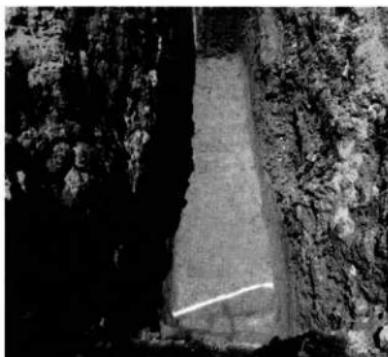
- ・米田敏幸・他1981「八尾南遺跡－大阪市高速電気軌道2号線建設工事に伴う発掘調査報告書－」八尾市教育委員会



北部機械掘削(南西から)



西部機械掘削(北西から)



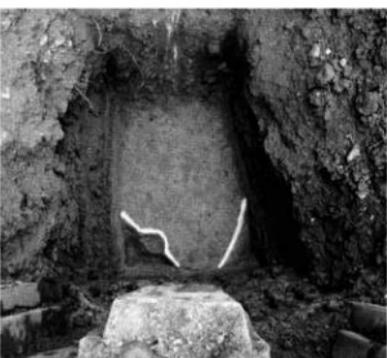
北部第1面(東から)



東部第1面(南から)



西部第1面(西から)



北西部第1面(西から)



西部西壁



北西部西壁



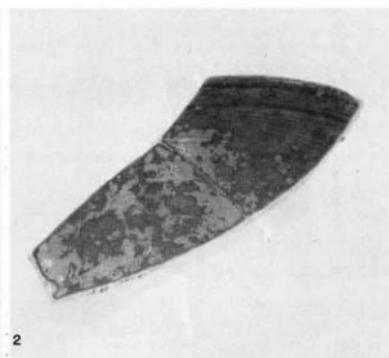
北壁下层



西部掘削状况



1



2

# 報告書抄録

ふりがな	うえまついせき	おおたけいせき	みずこしいせき	やおみなみいせき
書名	植松遺跡 大竹遺跡 水越遺跡 八尾南遺跡			
副書名				
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告			
シリーズ番号	134			
編著者名	I・IV 成海佳子、II・III・V 坪田真一(編)			
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会			
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX 072-991-4700			
発行年月日	西暦2011年3月31日			

所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積(m <sup>2</sup> )	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
うえまついせき 植松遺跡 (第11次調査)	おおさかふやおしやすなからちょうじょうめ 大阪府八尾市安中町4丁目	27212	63	34度 37分 03秒	135度 35分 50秒	20100126	約6	記録保存調査
うえまついせき 植松遺跡 (第12次調査)	おおさかふやおしやすなからちょうじょうめ 大阪府八尾市植松町3・4丁目	27212	63	34度 37分 01秒	135度 35分 49秒	20100127 ～ 20100203	約36	記録保存調査
おおたけいせき 大竹遺跡 (第2次調査)	おおさかふやおししむすこじょうじょうめ 大阪府八尾市水越8丁目	27212	56	34度 38分 08秒	135度 38分 42秒	20110125 ～ 20110127	約15	記録保存調査
みずこしいせき 水越遺跡 (第10次調査)	おおさかふやおししむすこじょうじょうめ 大阪府八尾市水越7丁目	27212	42	34度 37分 58秒	135度 38分 42秒	20100112 ～ 20100119	約95.3	記録保存調査
やおみなみいせき 八尾南遺跡 (第34次調査)	おおさかふやおにしあのそとじょうじょうめ 大阪府八尾市西木の本4丁目	27212	67	34度 35分 58秒	135度 35分 02秒	20100308 ～ 20100330	約136	記録保存調査
やおみなみいせき 八尾南遺跡 (第35次調査)	おおさかふやおしわかばやじょうじょうじょうめ 大阪府八尾市若林町1丁目	27212	67	34度 35分 49秒	135度 34分 58秒	20100604 ～ 20100607	約16	記録保存調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
植松遺跡 (第11次調査)	集落	近世	落込み、自然河川		
植松遺跡 (第12次調査)	集落	近世	溝		
大竹遺跡 (第2次調査)	集落				
水越遺跡 (第10次調査)	集落	鎌倉時代 室町時代	溝 井戸	土師器、須恵器、瓦器、国産陶器 円形板	
八尾南遺跡 (第31次調査)	集落	古墳時代前期 平安時代後期 鎌倉～室町時代 近世	溝 自然河川 自然河川 土坑、溝	土師器、瓦器 須恵器、瓦器 国産磁器、木製品	
八尾南遺跡 (第35次調査)	集落	平安時代	溝	土師器、黒色土器	

要約	植松遺跡では古入和川の主流であった長瀬川に起因する砂層を確認した。大竹遺跡は表上直下が地山層であった。水越遺跡では、八尾市域東部の比較的高所においても、鎌倉～室町時代の聚落が展開していたことを確認した。八尾南遺跡では古墳時代前期、平安時代の遺構を検出した。
----	--

(財)八尾市文化財調査研究会報告134

- I 植松遺跡 (第11・12次調査)
- II 大竹遺跡 (第2次調査)
- III 水越遺跡 (第10次調査)
- IV 八尾南遺跡 (第34次調査)
- V 八尾南遺跡 (第35次調査)

発行  
編集 平成23年3月  
財団法人 八尾市文化財調査研究会  
〒581-0821  
大阪府八尾市幸町四丁目58番地2  
TEL・FAX 072-994-4700

印刷  
株式会社近畿印刷センター  
表紙 レザック66 <260Kg>  
本文 ニューエイジ <70Kg>  
図版 ニューエイジ <70Kg>

